



■ 聖路加看護学会ニュースレター

第12号 平成14年11月30日 2002.11.30 No.12

過去のニュースレター

■ 目次

第7回聖路加看護学会学術大会を終えて

大会長 井部 俊子

第7回聖路加看護学会学術大会の開催

第7回聖路加看護学会学術大会企画委員会

第7回聖路加看護学会学術大会の報告

- プログラム
- 座長・司会者のメモから
- 大会参加者から参加できなかった会員の方へのメッセージ
- 総会の焦点

第8回聖路加看護学会学術大会に向けて

中山 洋子(福島県立医科大学看護学部)

第8回 学術大会ご案内(第1報)

理事長挨拶

菱沼 典子(聖路加看護大学)

お知らせ

編集後記

↑ TOP

■ 内容

第7回聖路加看護学会学術大会を終えて

大会長 井部 俊子

2002年9月28日、小雨もようの土曜日が第7回聖路加看護学会の開催日でした。今回のメインテーマを、私の長年の関心事でありました「看護と文学」といたしました。このテーマは、聖路加看護学会だからこそ実現でき、かつ、聖路加看護学会にふさわしいテーマであったと考えています。ここ数年の間に、医療界はEvidence-based Medicine (EBM)の台頭がめざましく、看護界もその影響を受けています。聖路加看護大学の講堂でも、EBMセミナーが頻回に行われています。医療は、しかしながら、根拠にもとづいた科学的な実践とともに、個人的かつ主観的な体験も内包しています。そうした実践手法の表現形態を文学の本質に見ることができないかと考えていたわけです。

特別講演の中で大江健三郎氏は、看護と文学の共通点を述べた後で、相違点について「ケアの向こう側」(D. F. チャンブリス, 浅野祐子訳, 日本看護協会出版会, 2002年)から、ある驚きをもって話されました。それは、ナースたちが行なう「不幸のルーチン化」ということです。原著では“disaster”書かれているところが「不幸」と翻訳されていることに言及し、小説家は、日常のできごとを「異化する」営みであり、この点が決定的な違いであると述べられました。この記事を書くにあたり、「私という

小説家の作り方」(大江健三郎, 新潮社, 1998年)をとり出しています。

以後、私は「不幸のルーチン化」という現象がわれわれにとっていったいどのようなことなのかを考え続けることになりました。

聖路加看護学会でとり上げたNarrative-based Medicineが、EBMと共に普及していく期待とともに、“narrate”と“relate”の関係の追究を皆さまとともに続けていきたいと思えます。

聖路加看護学会の開催にあたり力を貸して下さった仲間に心より感謝いたします。

↑ TOP

第7回聖路加看護学会学術大会の開催

第7回聖路加看護学会学術大会企画委員会

「看護と文学」をメインテーマとした第7回聖路加看護学会は、9月28日(土)9:30~17:00まで、聖路加看護大学において開かれました。

前日から雨模様で、出足が心配されましたが、会員と一般参加者348名という多くの方々が参加登録をされました。

井部俊子会長の講演“看護における物語り性の追究”はクマのプーさんの物語から始まり、人間は、各々自分の「物語り」を生きていること、そして病気もまたその物語の一部であること。それ故、患者のナラティブを重視することは、人間全体性のアプローチにつながると述べられた。更に看護師の物語の実践例として、聖路加国際病院看護部のキャリア開発ラダーで用いられている、物語風に記述された事例を読んで好意的なフィードバックを行う例を紹介された。ナラティブが、これからの看護の発展の視座としての有用性をわかりやすく話された。

そして、大江健三郎氏の“語る人、看護する人”の教育講演は、看護と文学のメインテーマにひきつけられ、深くご講演を引き受けられた経緯の紹介からはじまり、時間をこえて、楽しそうに語られ、聴くものはすっかり惹きつけられました。講演内容は学会誌に掲載されますが、看護師と小説家の違いとして看護師は、人の死や病いをルーチン化していること、人間の語りは、relateすることであり、注意力をこらして努力することがその背景にあること、そして、ひとり一人のナラティブが集まり、病院のナラティブになるなど、小説家としてナラティブ看護への期待を語られました。

続く、シンポジウム“患者が語る物語・看護師が語る物語”は、3人のシンポジスト、「闘病記からみる患者の世界」和田恵美子さん(大阪府立看護大学)、「臨床看護師の語り」菊池友里さん(聖路加国際病院)、「インシデントレポートからみる看護状況」寺井美峰子さん(聖路加国際病院)が、パワーポイントを上手に使われ、3人の語り手と会場の聞き手が共同して語りの内容を共有しながら、看護ケアの意味や人間理解をすることなどへの学びを深めました。

研究発表は、一般講演15題と事例検討2題、そして、ポスターセッション5題であり、その内容は広く看護の領域を網羅していました。今回、初めて取り入れたポスターセッションは、発表者と参加者が、共に近い距離で質問や意見を交換し、自由な雰囲気は双方に学ぶ刺激となり、満足感をもたらしたと好評でした。

学会は、研究発表を中心に発表する者と参加者がその内容を共有し、討議を重ねる場であり、物の見方や考え方の幅の広がりや深さの深まる知的なたのしみの場でもあります。今回研究発表演題の申し込み後に、取り消しがあり、その中に他学会で採用されたので取り消しますという報を受け、事務局は戸惑いました。

本大会は、人が語ることの意味や語りがかケア現場で看護ケアを豊かにする体験を知らされ、語り(ナラティブ)アプローチが、人間理解への有用な方法のひとつとなり、語りへの関心を向けることが、看護ケアそして看護学の豊かさを開くものとなり得る希望を感じましたが、いかがでしたでしょうか。

多くの方々が本大会を盛り上げて下さったことに感謝しつつ、来年の学会へバトンタッチをいたします。ありがとうございました。

↑ TOP

第7回聖路加看護学会学術大会の報告

●プログラム

<日時> 2002年9月28日(土)9:30~17:00
<会場> 聖路加看護大学
<メインテーマ> 看護と文学

会 長 講 演 9:35~10:30
“看護における物語り性の追究” 井部 俊子 (聖路加国際病院)

特 別 講 演 13:50~15:00
“語る人、看護する人” 講師 大江 健三郎

シンポジウム 15:15~17:00
“患者が語る物語・看護師が語る物語”
シンポジスト

「闘病記からみる患者の世界」 和田 恵美子 (大阪府立看護大学)
「臨床看護師の語り」 菊池 友理 (聖路加国際病院)
「インシデントレポートからみる看護状況」 寺井 美峰子 (聖路加国際病院)

●一般口演

第Ⅰ会場 10:45～12:00 座長 田中美恵子(東京女子医科大学看護学部)

1. ある路上生活者の体験的世界
下平唯子(東京都立保健科学大学)
2. 視覚障害を生じ、生きるということ
～中途視覚障害を生じた2人の女性の語りから読みとれる意味～
旗持知恵子(山梨県立看護大学短期大学部)
3. 慢性血液透析患者の“気持ち”の探求方法
～「語り」分析の試み～
森田夏実(慶応義塾大学看護医療学部)
4. 地域で暮らす高齢者の安全を守る看護プログラム
～高齢者の生活のナラティブを重視したプログラムの展開の重要性～
野地有子(札幌医科大学)
5. 基礎看護学実習で重症患者との出会いから別れを体験した学生の体験世界
～ナラティブ・インタビューを用いた事例検討～
矢野理香(天使大学)

第Ⅱ会場 10:45～12:00 座長 池亀俊美(聖路加国際病院)

6. 周手術期看護領域の授業と臨床実習間の連動に関する研究
大野和美(天使大学看護栄養学部)
7. 心臓外科手術後の創感染減少と経済性への影響
沼口史衣(日本看護協会 看護教育・研究センター)
柴田 清(聖路加国際病院 感染管理室) 市川雅人(聖路加国際病院 企画室)
8. 退院を控えた心筋梗塞患者のリハビリテーションに向けてのストレスの知覚および対処
菊地麻由(東京慈恵会医科大学附属病院) 外崎明子(聖路加看護大学)

第Ⅳ会場 10:45～12:00 座長 黒川寿美江(聖路加国際病院)

9. NICUにおいて母親が経験したケアの実際
～Family Centered Care(FCC)に焦点をあてて～
土屋由美子(トヨタ記念病院)
10. 第2子出産に関連して母親が体験したこと
～第1子に対する想いを中心に～
齊藤淳子(稲田助産院) 有森直子(聖路加看護大学)
11. 小人数参加型の出産準備クラスに参加した一男性の父親になる体験
永森久美子(豊倉助産院) 堀内成子(聖路加看護大学)

第Ⅴ会場 10:45～12:00 座長 太田喜久子(慶応義塾大学看護医療学部)

12. 老人保健施設利用者と「分かちあい」の関係に至るまでの看護師のしぐさの分析
武内和子(健和会臨床看護学研究所)
13. ケアに見る間主観的人間関係モデルを考える試み
大迫哲也(聖路加看護大学)
14. 看護における「安楽」という用語の意味するもの
～和文献と実践場面で使用されている側面から～
佐居由美(聖路加看護大学)
15. GHQ占領下におけるわが国の看護教育の成立過程
～東京看護教育模範学院設立まで～
奥宮暁子(大阪大学) 坪井良子(山梨医科大学)
平尾真智子(帝京平成短期大学) 石川ふみよ(東京都立保健科学大学)
佐藤公美子(山梨医科大学)

●事例検討

第Ⅲ会場 10:45～12:00

司会 豊増佳子(聖路加看護大学)

特定機能病院看護管理の実践報告

鶴田恵子(東京医科歯科大学医学部附属病院 看護部)

第Ⅵ会場 10:45～12:00

司会 野末聖香(慶応義塾大学看護医療学部)

病識のない患者へのアプローチのあり方について

～困難を要した摂食障害患者への看護を通して～

紺井理和(聖路加国際病院)

●ポスターセッション

2階ラウンジ 10:45～12:00 司会 香春知永(聖路加看護大学)

1. シューカバーに対する手術室看護師の意識
～意識調査アンケートを試みて～
頼広映理子 廣田明子 柴田 清(聖路加国際病院)
2. 異型輸血事故をめぐる看護職員の安全意識の変革過程
奥村百合恵 木下安子(新潟青陵大学)
3. 看護師の日常ケア場面で感じるストレスと看護職アイデンティティとの関係
井上 愛(聖路加国際病院)
4. 女子学生のリプロダクティブヘルス
～月経の経験と性意識・性行動に関する調査～
野田洋子(順天堂医療短期大学) 深谷いづみ(青山学院女子短期大学)
5. トイスラーと学校保健
今井敏子(東洋英和女学院小学部)

●座長・司会者のメモから

第Ⅰ会場

■メインテーマと関連した演題が多く、会場はほぼ満員となり盛況でした。

「体験を聴く」ナラティブアプローチによる研究発表のため、発表内容に聞き入っている様子が見受けられ、聴衆の雰囲気は熱心で温かな感じを受けました。10分の発表、5分の質疑は、このタイプの研究の場合、討論を深めるのが難しく感じましたが、全体的に運営はスムーズに運びました。

第Ⅱ会場

■会場の雰囲気は、20名前後と静かで落ち着いた様子であった。3題各々に質問がなされ、ディスカッションは活発であった。

第Ⅲ会場

■看護組織体制に取り組む上で必要な論点を多角的な視点にしたいために、自由闊達な意見交換を期待するとして、特定機能病院の厳しい現状を提示された。大きな話題だったので、焦点をもう少し絞れば、討議が深められたかもしれない。

第Ⅳ会場

■NICUでの家族を中心においた看護、産前教育、出産体験がテーマの3題でした。自分の子どもがNICUに收容された経験からの意見や、産後の家庭訪問で母子に接している方からの質問、ポジティブ、フィードバックなどがあり、有効な意見交換ができた。雰囲気も柔らかかったので、時間にも余裕がありました。マイクの調子が悪かったのが気になりました。

第Ⅴ会場

■2題はケアに関わる関係性に焦点を当てたもの、1題はケアにおける基本的な用語の追究、1題は日本の看護教育の歴史的転換を分析するものであった。看護実践へのこだわりある意見交換や、歴史を生きた人々からの体験に基づく視点を知らされ、学会にふさわしく、刺激を受けることができました。

第Ⅵ会場:事例検討

■一般病棟における摂食障害患者の事例検討で、事例提供者から、精神科治療を拒み続ける患者とのかかわりの中で抱えた様々な葛藤や、関わることすら難しい体験などが語られ、参加者も追体験しつつ、事例の理解を深めていきました。転院先の専門看護師の参加もあり、事例をより深く理解することができました。一般病棟で、どのように精神病理を理解すればいいか、また、一般病棟という治療構造の限界の中で、看護にできることは何か、などについて話し合いました。患者の奥底にある気持ちをより深く理解しようとする、回復を急がさぬよう継続して見守ること、そういったナースの気持ちを患者に伝えることも、重要であることを再認識した事例検討でした。もう少し時間がほしかったです。

2階ラウンジ:ポスターセッション

■初めての企画のポスターセッションでした。

発表者と聴衆者である参加者が、近い距離で発表を中心に、お互いの意見を交換できる場でした。特に質問や意見は、気負いもなく自然な形で両者のやりとりが行われました。

社会人1年目の若い発表者からベテランまで、内容も歴史的な視点、女性のリプロダクティブヘルス、医療事故、看護者のストレスや感染防止への意識など多岐にわたり、興味深かったのではないかと思います。

発表者、質問も熱心で、いくつかの演題では、持ち時間のオーバーになるようなこともあった。両者の研究に対する熱意が伝わるセッションでした。

↑ TOP

●大会参加者から参加できなかった会員の方へのメッセージ

★ユーモアと示唆に富んだ会長講演、特別講演に改めて看護の深さに気づかされました。いつしか与えられた仕事をこなすだけになってしまっていたのですが、発表者をはじめ、出席された皆様から、刺激と元気をいっぱいもらうことができました。

(北海道 55歳 K.H.)

★初めての参加です。口演とポスターセッションが、わずか1時間15分と短すぎます。「学術大会」の焦点はどこに？。1日のみ開催ならば、講演者は1人、シンポジウムは短縮して大勢の人に発表の場を提供すべきではないでしょうか。

(神奈川 50代 C.Y.)

★講演、発表、シンポジウムを通し、「人」にとって「語り」ということが自然であるとともに、大切であるということが改めて感じられた。初めて出席しましたが、有意義な1日でした。

(東京 40代 T.M.)

★物語り(ナラティブ)は、臨床現場のナースにとって「絵に描いた餅」ではないかと思っていました。けれども、講演や、シンポジウムに参加して、ナラティブを看護業務の中にかに取り入れていくかについて、多くの示唆を得ることができました。

(東京 38歳 S.N.)

★井部さんが大会会長をされること、「看護と文学」のテーマに魅力を感じ、北海道から参加しました。会長講演、特別講演は、目先のことに忙殺され、見失いかけていた看護の原点に立ち帰らせられる内容でした。懐かしい方々にもお会いすることができ、まさに命の洗濯の1日でした。

(札幌 37歳 M.H.)

★EBM、NBMを補完するものとしての、Narrative Basede Medicineの重要性、特に看護におけるその価値について学ぶことができました。物語りをどの様に記述し、分析していくのか、そしてそれを看護の力としていくのか、追究して参りたく存じます。

(東京 30代 S.S.)

★ナラティブは、患者が物語ることという意味を一番強いイメージとして持っていました。講演やシンポジウムでそれぞれ違う立場の方のお話を聞いて、多様なものであり、その深さを感じました。また、学会のファミリー的な面と大学の歴史の重みも感じられ、頑張らなくてと思う1日となりました。

(東京 30代 M.N.)

★会場によっては、スケジュールがつまっていた、質疑が十分にできなかったのが残念です。大江健三郎さんの話は、楽しく聞きました。

(東京 30代 M.)

★テーマ「看護と文学」と大江健三郎氏の講演にさそわれて、参加を申込みました。看護管理者として事例検討で勝手な報告を行い、悩める臨床現場に浸りすぎている時に、大江氏の講演は光を見出させてくれました。思索する文学者のあり様に心が洗われました。感謝です。

(東京 K.T)

↑ TOP

●総会の焦点

2002年度総会は学術大会長の井部俊子氏を議長として、2002年度の活動報告、会計報告、2003年度の事業計画および予算案その他について説明と質疑応答が行われた。

今年度の活動報告の中に、3つの大きなトピックスがありました。1つめは、役員選挙です。川口千鶴氏、島田真里恵氏、岩田多加子氏からなる選挙管理委員会により、5地区別に厳正に選挙が行われ、新評議委員29名(半数のみ改選)が決まりました。またこの新評議員による理事選挙の結果、新理事7名が決まりました。2つめは、研究団体として登録申請をしていた第19期日本学術会議への登録が承認されました。聖路加看護学会が研究団体として認められたこととなります。今後の研究活動が益々盛んになることが期待されます。3つめは、ホームページ(<http://slnr.umin.jp>)の立ち上げです。素敵なブルーのパステルカラーを基調にして、当学会の活動が紹介されています。これまでの学術大会のメインテーマも紹介されています。また、入会申込用紙が簡単にダウンロードして入手できますので、新しい会員の方を研究仲間にお誘いください。会員の

方でしたらどなたでも推薦人になれます。今後は、事務局ともメールでやりとりすることも可能になることや、ホームページの内容充実により、会員の皆様と学会のつながりがより強く、身近なものとなることが期待されます。その他の報告事項として、庶務からは、9月27日現在の実質会員数が549名であること、学会誌編集委員会からは、学会誌への投稿が多領域に渡っていることや、学部卒業生や若手研究者の投稿も増えてきていること、および査読の新ガイドラインを作成したこと、ニュースレター委員会からは、ページ数を増やして内容を充実させたこと、学術交流委員会からは、「癒しの技術—シュタイナーの全人的理論に基づいたリズムカル・マッサージプログラム」というテーマで、学術交流絵が開催され好評であったことなどが報告された。これらの報告に関して、会場から特別な質問はありませんでした。2002年度の会計報告では、看護系学会協議会への加入に伴う年会費の納入が新しく含まれていることが報告され、監事より、2002年度の会計報告に間違いがなかったことが報告されました。

審議事項として、初めての評議員選挙に伴う会則9条第2項の一部改正について承認されました。また、2003年度の事業案と予算案はすべて承認されました。これまでの各委員会の活動内容をさらに充実させながら継続させていくこととなります。

今後も会員の活動の輪や関心の幅が広がり、さらに充実した学会として発展していけますようご協力をお願いいたします。また学会運営のために会費納入のご協力をよろしくお願い申し上げます。その他、現在5名の名の会員の方々の住所が不明で、ニュースレターなどがお届けできません。住所変更は、お早めをお願いします。

事務局

↑ TOP

第8回 聖路加看護学会学術大会に向けて

中山洋子(福島県立医科大学看護学部)

第7回の学術大会長の井部さんからバトンを受け取り、福島に帰って2ヶ月が経ちました。看護の物語性についてあれこれと想いを膨らませたり、大会事務局から送られてきた大江健三郎先生自筆の色紙のミニ版を見入ったりしている内に秋は足早に駆け抜け、福島の山々は雪に覆われてしまいました。

第8回の学術大会は、2003年9月27日(土)に聖路加看護大学で開催いたします。テーマは、私が聖路加看護大学在職中に最も関心があった「臨床の知」や「臨床研究の方法」などに焦点を当ててみようと思っています。臨床看護の重みを感じとれるような哲学的な討論ができることを期待しています。

私は看護は人への働きかけであり、人間の行為としての営みであると考えてきました。実践なくしては看護は成り立たないということを信条としてきています。このこだわりから看護行為の本質を人に理解できる形にして表現したいということが私の追い続けてきた課題でもあります。実践の知の問題は、Practical Knowledge, Knowing-how, 実践知, 暗黙知, 経験知など、さまざまに論じられてきていますが、看護の知の体系化までには到っていません。私も看護現象を明らかにしようと帰納的な研究を試みっていますが、まだ、水脈を掘り当てたという実感はないままにいます。

めざましく科学(Science)が進歩していつている時代に少し冒険ではありますが、科学にはつながらない看護の水脈を掘り当て、科学と対峙させて哲学的な論争ができればと考えています。そのための論客を探すことから、第8回の準備は始まることとなりますが、討論の形式にも新たな工夫を試みたいと考えています。皆様と一緒に学術大会を作りあげていきたいと思っていますので、素敵なアイデアと御協力をお願いいたします。

↑ TOP

第8回 学術大会ご案内(第1報)

日時	:2003年9月27日(土) 9:00AM~5:30PM
場所	:聖路加看護大学
演題申込み締切り	:2003年3月31日
原稿締切り	:2003年5月31日

- 口頭発表、事例検討、話題提供などにふるって応募下さい。
- 第2報は、来年2月の次回ニュースレター発行時に致します。

大会事務局: 福島県立医科大学看護学部
第8回聖路加看護学会学術大会事務局
FAX 024-547-2392

↑ TOP

理事長あいさつ

菱沼典子(聖路加看護大学)

1996年に発足した本学会は丸6年が経過し、発会当時から学会の基礎固めと発展に尽力いただいた役員の方々が、交代の時期になりました。第1期、2期と理事長を務められた常葉恵子氏からバトンを受け、2003年度(2002年10月~2003年9月)から3年間、第3期の理事長を務めることになりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

3年あるいは6年間理事を務められた皆様、また発足から6年間にわたり、一貫して本学会の発展のために活動していただきました評議員の皆様、厚く御礼申し上げます。お陰様で学会員は500名を越え、次期日本学術会議への登録もすまますこ

とができました。

改めて申し上げるまでもなく、本学会は様々な研究手法を用いて看護の現象を明らかにし、新しい見解を加えた看護学の修士論文・博士論文の発表の場として、また、日々の看護実践の中にもとすると埋もれてしまう看護ケアを引き出して発表する場として発足しました。学会誌に掲載された論文や学術大会の演題発表の内容を見ても、また学術大会の事例検討や話題提供といったプログラムの立て方を見ても、この目的に添って学会が運営されてきたことがわかります。さらに学術大会のメインテーマからは、看護学の新しい流れの提案を読みとることができます。

現在看護学界では、専門領域が分化し、数多くの学会が生まれています。看護学全般をカバーする学術団体としての本学会は、看護学の追究に対して斬新的な切り口を提案していく学会であり、実践を研究の原点とし、実践へ還元できる研究成果を示す学会であることを使命としています。会員の皆様が看護実践の向上をめざした研究活動を通して、積極的に学会に参加していただくことを願っています。

第3期理事会メンバーと役割

庶務	佐藤エキ子	亀井智子
会計	中山洋子	桃井雅子
学会誌編集	小松浩子	上泉和子
ニュースレター編集	田代順子	
学術交流	太田喜久子	

[↑ TOP](#)

お知らせ

★学術交流委員会から

平成15年度の新しい委員会がスタートします。

新しい委員は下記の方々です。

大久保暢子、上泉和子、小松浩子(委員長)、鈴木里利、長岡由紀子、野末聖香、水野敏子(もう一名加わる予定です)

会員の皆様の研究成果を分かち合う場として、学会誌を活発に活用して頂けることを委員全員願っています。

聖路加看護学会学会誌は、随時受け入れています。今年度第7巻、第1号の発行(2003年6月発行予定)に間に合うための提出期限は、2003年1月31日 になっています。

多くの皆様からの投稿をお待ちしています。

(担当理事:小松浩子、上泉和子)

★ 会計からのお願い

2003年度の活動は、10月1日から始まっています。本年度の年会費(5000円)の納入をお願い申し上げます。振込先は下記の通りです。同送の振替用紙をご利用下さい。

年会費の振込先:郵便振替口座 00100-8-670371
加入者名:聖路加看護学会
年会費:5,000円

(担当理事:中山洋子、桃井雅子)

[↑ TOP](#)

編集後記

このニュースレターは第2期のニュースレター編集委員から第3期委員への移行号で、ほとんどが第2期の委員の方々のお力で発行することができました。聖路加看護学会会員の相互の繋がりを大切にしたいコミュニケーション誌として発行されてきました。そのニュースレターの学会内での大きな役割を大切にしたいとニュースレター誌の発行をめざしたいと考えています。どうぞ宜しくお願いします。(J.T) [↑ TOP](#)

[▲ ページトップへ](#)

[学会について](#) | [入会案内](#) | [お問合せ](#) | [よくある質問](#) | [学術大会](#) | [ニュースレター](#) | [学会誌](#)

St. Luke's Society for Nursing Research | [サイトマップ](#)